

<b>Title</b>	徳富蘇峰と帝国日本の魂
<b>Author(s)</b>	梅津, 順一
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,19(2) : 168-139
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=62">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=62</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 徳富蘇峰と帝国日本の魂

——「大正の青年」の使命をめぐって——

梅津 順一

- 一、はじめに
- 二、「明治の青年」と「大正の青年」
- 三、日本帝国の過去と現在
  - 1、開国と国辱
  - 2、維新と国民的精神
  - 3、帝國的自覚
- 四、日本帝国の使命
  - 1、日本帝国の危機
  - 2、亜細亜モンロー主義
- 五、「大正の青年」と「日本魂」
  - 1、積極的忠君愛国
  - 2、「日本魂」
- 六、おわりに

### 一、はじめに

戦前日本を代表するジャーナリスト徳富蘇峰は、言論界の雄として絶えず国民を鼓舞した存在であったが、その主張の振幅の大きさでも知られる。明治十年代の末、急進的欧化主義者として論壇に登場した徳富は、大東亜戦争主戦論のイデオログともなったのである。<sup>1</sup>一九一六年（大正五年）に刊行した『大正の青年と帝国の前途』<sup>2</sup>の序文で、徳富は本書が明治十九年出版の『将来之日本』、および明治二十年出版の『新日本之青年』を改作したものであると記している。明治憲法の発布を目前に平民主義の旗を掲げた徳富は、この時点では、日清戦後の「力の福音」への帰依をへて、帝国主義者としての面目をはっきりと現していた。徳富自身の語るところによれば、大正二年出版の『時務一家言』が新しい意見を赤裸々に表明したものであり、第一次世界大戦の勃発に際して『世界の変局』を書き、さらに国内政治に関して

(1)

『大正政局史論』を著した。こうした内外の情勢分析を前提として、『将来之日本』と『新日本之青年』の改作として、『大正の青年と帝国の前途』が著されたのである。

端的に言って『将来之日本』は、内外の状況が民主主義に傾いていゝるなかで日本の進路を指し示すことであり、『新日本之青年』はその新しい日本を担う青年の資質を問うものであった。明治の初年、古い日本と新しい日本がせめぎあう「人心の騒乱」のなかで、次代を担う青年が、西洋平民社会の「平民道德」を身につけ、社会的職分を果たすことを求めたのである。では、「力の福音」に帰依し、自由貿易と平和主義から離れた徳富は、「大正の青年」に対してどのような資質を求めたのであろうか。以下では、『大正の青年と帝国の前途』を手がかりとして、徳富蘇峰の大正青年への期待を浮き彫りにすることにした。それは帝国日本を担うべき青年の資質であり、帝国日本を担う精神的な基礎の探求なのである。

徳富の主張をあらかじめ見ておけば、帝国日本を積極的に推進する「日本魂」、「積極的忠君愛国」が重要であるといわれる。『将来之日本』で「明治の青年」に呼びかけた「平民道德」が、プロテスタンティズムを基盤とした西洋市民社会の道德であったのであるから、「大正の青年」に示唆する「日本魂」といい「忠君愛国」というのは、いわば伝統への回帰であり、若き日の精神を脱ぎ捨てた復古主義であるかのように思われるが、必ずしもそうではない。確かに蘇峰は「忠君愛国」を日本の伝統的思想として求めたが、他面では「ドイツ魂」「米國魂」に

学んだ「日本魂」でなければならないとも言っている。『大正の青年と帝国の前途』の末尾で、徳富が「自恃の精神」の重要性を力説するとき、そこで参照されたのはニューイングランドの思想家エマソンであった。とすれば、帝国主義の「日本魂」には、「平民道德」の遺産も入り込んでいるのではあるまいか。ここでは徳富蘇峰における「平民道德」と「日本魂」との連続と断絶についても検討することにした。

## 二、「明治の青年」と「大正の青年」

青年徳富蘇峰は、福沢諭吉の『文明論之概略』と『学問のすすめ』の主題を継承しながら、『将来之日本』と『新日本之青年』を書いた。<sup>3</sup>すなわち、欧米社会の動向を文明論的に位置づけた上で、日本もまたその進路をとるべきこと、さらにそれを担う知識青年の役割を論じていたのである。そこには新しい社会を担う、新しい世代への期待が語られていた。徳富自身が明治維新直前に生まれ、熊本洋学校から同志社英学校と、直接英語で教育を受けた経験を持つ新世代であり、しばしば「明治の青年」と呼ばれる。『新日本之青年』とは、プロテスタンティズムの影響を受け、新日本の形成に参与しようとした自らの自負を表現したものに他ならない。そこには世代論的なアプローチが見られ、社会における青年の役割が意識的に記されていることが注目される。

蘇峰は将来の社会がどうなるかは、現社会の青年を手がかりにすることができるといふ。「人若し日本将来の社会は如何なるかを問はば、彼の青年の社会に來たりて之をみよ。それ学校は青年の社会なり。試みに渠輩が講読するところの書籍は如何。渠輩が風采は如何。その討論するところは如何。その運動遊戯するところは如何。その喜ぶところ、その愛するところ、その憂るところ、その怒るところ、その悪むところは如何。……けだし彼の青年なるものは社会の継続者なり」。

「彼の青年なるものは、当時の傾向流行を代表するに止らず、また流行の新奇なるものを代表するものなり。すなわち、社会流行の先登者なり」「彼の老人なるものは、社会に住するにもつとも古、且つもつとも久しきが故に」、新しい流行には反発するしかない。「老人は旧き空気に養はれ、青年は新しき空気に養はれ、老人は肉体の萎靡とともに、その精神に退守の傾向を生じ、青年は肉体の活潑とともにその精神に進取の傾向を生ず」。いずれにせよ、「概してこれを論ずれば何の時代の何の封土を問わず、老人は秩序の味方にして、青年は進歩の朋友たるは決して疑ふべからざる事実なりとす」。したがって青年は社会の新しい傾向を看取し、柔軟に対応し、積極的な行動に向うと考えられた。実際、古今東西の歴史を見ても、新しい変革は青年の手によつてもたらされたことは明らかであると徳富は考へる。たとえば、イギリスの「封建時代の末路に際し、……この制度を推倒したるものは、オクスフォード大学の講堂より出たり」。それに宗教改革もまた、ウィットンボルク大学から生まれ、日本に例をとつても、維新の改革は「徳

川氏の親藩たる水戸の弘道館より、あるいは徳川氏の設立したる江戸の昌平黌より」源を発するものであつたし、尊皇攘夷を掲げて運動した者たちは、松下村塾に学んだ青年たちであつた。とすれば、この憲法政治の施行を前にして、「我国自由改進の大運動」を推進する上で、「先登者となるは、ただ我が青年書生」に他ならない。したがって、社会の進歩、文明の進展のためには、青年教育が最重要の課題となるわけである。

結論的にいえば徳富は、「明治の青年」に対して平民社会の道德を身につけることを説いた。「平民社会の人民、なんぞそれ快活なるや。身を終る迄人に膝を屈したることなく、世を没する迄人に憐れみを乞ふたることあらず。不尽の乾坤、無辺の風月、靈妙活潑の能力を施用して飽く迄これを占領し、仰て天に忤、俯して地に愧じず、毎朝その業をはじめ、毎夕その業を終う。」ここではロングフェローの「田舎の鉄鍛工」の詩が引かれ、「明治の青年よ。若し生活をなさんと欲せば、願わくは泰西自活的の人となれ」といわれる。徳富にとつて青年が崇拜すべき英雄は、文筆家としてはミルトン、軍人としてはゴルドン、教師としてはホイットフィールド、政治家としてはコブデン、ブライトなのであり、その背景にはプロテスタントイズムが念頭におかれていたのである。

このように『新日本之青年』が念頭に置く「明治の青年」が、維新前後に生まれ明治の歩みと共に成長した世代であるとすれば、「大正の青年」は「大正五年、二十歳とすれば」、「明治二十七八年日清戦役

の前後に生まれ出でたるものなり。明治三十七八年日露戦役の前後には、わずかに小学科程の半を過ぎたるものなり。彼らは実に生まれながらにして、風雲の気を呼吸して、出で来たりたるもの也。彼らは実に国運興隆の雰囲気を抱擁せられて、出で来りたるなり。徳富の眼から見れば、彼らは「あたかも金持三代目の若旦那」であった。松下村塾で育った青年が奔走して実現した維新の改革は、国家独立のための内政の統一、国運の興隆を実現する以前に、一国の独立を緊急の課題とした。これに対して「大正の青年」は「未だかつて日本帝国の独立を心配すべく、なんらの事実を見出さざるなり」、彼らは「実に安全というべし。安全なるが故に、また呑気至極」なのである。<sup>10</sup>

その「金持ちの若旦那氣質」にあふれた「大正の青年」にもいくつかのタイプがあると徳富は見えていた。第一のタイプは「模範青年」で、行状が円満で勉強家、それに自己広告も上手な青年たち。第二のタイプは「成功青年」で、大正時代の成功熱に浮かされて、「カーネギー、モルガンは固より、近くは岩崎、安田より、あるいは現在の船成金」をモデルと考えている青年たちである。第三のタイプは「煩悶青年」であり、青年特有の「功名と恋愛」とに翻弄され、「落第したるために、汽車に轢かれて自殺し、失恋したるために、滝つぼに陥りて自殺したる」ものたちなのである。<sup>11</sup> 第四のタイプは「耽溺青年」であり、その哲学は「いわゆる刹那主義」であり、「人生いくばくぞ、たとえば朝露のごとし。この瞬間において、鹿爪らしき理屈を唱え、苦虫を噛み潰したるようなる顔色をなし、自ら緋いたる繩に、自ら縛せられんより

も、むしろ面白く、おかしく、楽しく、現在を送るにしかんや」というのが彼らの信条なのである。<sup>12</sup>

徳富はもう一つ、「無色青年」というタイプがあると見ていた。「彼らは中に自ら持するところなくして、ただ傍人の真似をなすのみ。いわゆる青年会が流行すれば、彼らはその一員たるを辞せず。政党が繁昌すれば、これにも一口加入し、時として基督教の説教も聴き、時として仏教の講演会にも出席す。必ずしも勤勉ならざれども、また目立つ程の怠惰ならず」<sup>13</sup>。彼らはいわば不和雷同する人々であり、徳富から見れば「我が青年の多数が、いわゆる善ともつかず、悪ともつかず、ただ社会の風潮、周辺の形勢に操縦せらるる」状態にあると映ったのである。

「現時の青年の社会教育における、あたかも活動写真を見物するのごとし。彼らが見物したる活動写真中には、千差万別の事件あり。あるいは殺人強盗もあり、あるいは世界的大戦争もあり、あるいはユーゴの哀史のごとき、面白き小説もあり。しかも看来看去、たちまちに來たり、たちまちに去る。しかしてそのあますところの印象幾許ぞ。観客たる青年の頭脳には、ただ秩序なき、系統なき、拉々、雑々たる、雑駁至極の混想を留むるのみ。」「されば彼らは新聞、雑誌、小冊子、講演、遊説、その他あらゆる目より入り、耳より入る学問にて、一通り世間と応酬するに差支えなき知識を得、かつ得つつあるなり。しかも彼らはこれを一貫するの、中心思想を有せざるなり。しかしてこれを駆使するの根本精神を有せざるなり」<sup>14</sup>。

しかし、それでよいのか。「彼らに深奥なる経世的の見識をもとむるは無理ならむ。該博なる世界的知識を求むるは難題ならん。されど少なくとも彼らは、日本国民として、その中心思想を、有せざるべからざるにあらずや」。ここで徳富が日本国民としての中心思想が必要だというのは、世界における日本国の位置自体が安定したものでないからである。「いかように鼻屑目に見ても、日本帝国の世界における位置は、成金のなり。日本帝国の位置は、国民自らうぬぼれるほどに、世界よりは識認せざるなり。…この小癩なる成金国の鼻尖を挫かんと、心中に業を煮しつつかあるものも、決してこれなしとせざるべし。日本帝国の前途も、また岌々乎として、危殆ならずといふべからず」<sup>15</sup>。すなわち、「国際的競争、人種の競争は、日に月にその激甚を加えつつあるに際して」、日本国民として確固たる自覚をもたない状況は亡国の兆しといわなければならない。

もとより、「国家以上に世界ある」を徳富は知らないわけではない。しかし、「今日の世界は、国を離れて家なく、家を離れて個人なし。…現在の社会においては、国家を除外して、人類の有力なる団体なきなり。国家はすなわち吾人の安心立命の地なり」とすれば、「国家は意識的に、その国是を定めざるべからず。国民は意識的に、その向ふところを定めざるべからず。しかし、青年は意識的に、その準備するところを定めざるべからず。政治もここに於てし、産業もここに於てし、軍備もここに於てし、教育もここに於てす。このごとく一切の力をあげ、一切の力を合せ、一切の力を養い、一切の力を動かし、しか

して後我が日本帝国の位置を、世界列強の間に占むるを得べきなり」<sup>16</sup>。徳富はこのように「大正の青年」に対して、日本帝国を担う自覚を求めたのであった。

### 三、日本帝国の過去と現在

#### 1、開国と国辱

ここで徳富は過去の日本を語ることによって、「大正の青年」に国家意識を持たせようと試みている。端的に言って、日本の開国史は国辱史であることを忘れてはならないのである。開国を求めて来航したペリー提督を、「開国の恩人として、その日本に対する好意と、親切とを永記」しようとして銅像を建てる動きがあるが、それは「見当違いもはなはだしい」。ペリーは「太平洋沿岸に捕鯨業行はれ、その業者たる合衆国民を保護する為に」、また「通商貿易の便宜を求め」たのである、あくまでも「米国のために」来航した。しかも、彼は「四隻の船艦を率い、戦闘準備をなして、嘉永六年六月三日に、浦賀湾に乗り込み、十日進んで江戸湾に闖入し、大砲を発して、上陸せんとするの勢いを示」した。彼は砲火に訴えてでも、日本開国の目的を達しようとしたのであり、これを徳富は「不承知の家に押婿入りをなすは、強姦と殆ど扱ふところなし」<sup>17</sup>とさえいっているのである。確かにこれは「名誉の開国」ではないわけである。

しかも、ペリーの使命は開国だけではなかった。当時、アメリカは

「太平洋およびシナ近海において、海洋の覇権を英国と争」っており、英国の香港に対抗して、「日本よりある港湾を割譲せしめ、あるいは琉球を占有せんとの下心」があったのである。事実、ペリーは浦賀に來航する以前に、「琉球に寄港し、小笠原に碇泊し、同島に貯炭所を設け、充分なる戦闘準備をなして」いた。<sup>18</sup>それに当時、日本の領土で危機に瀕していたのは、この琉球、小笠原に止まらない。イギリスとロシアは地政学上の要地である対馬に注目しており、ロシアの「シナ海艦隊長リハチョフ大佐が、対馬占領」をくわだて、「対馬の国主宗対馬守に向て、海軍根拠地租借の談判を開始」しようとしたことがあった。<sup>19</sup>幕府は英国公使オールコックの力を借りて、ロシアの対馬退去を実現したのであるが、そもそもロシアの対馬占領はイギリスの占領計画への対抗策という側面もあつたのである。

また、開国史においてイギリスが鹿児島を砲撃し、英、米、仏、蘭が馬関を砲撃した事件があつた。前者は、薩摩の大名行列を乗馬で横切つたイギリス人を殺傷したいわゆる生麦事件の善後処理として、イギリスが薩摩藩に賠償金の支払いを求めた行為であるが、日本の国内法からすれば、そもそもその行為が「非常なる不敬の沙汰」に他ならない。それに、長州の砲撃による攘夷の決行も、馬関が日本国内の港湾であつて開港場ではなく、馬関海峡自体も「日本の領海であつて、世界航海の公道にあらず」ということを勘案すれば、その砲撃自体は正当なものであつた。この二つの事件共に、日本の正當な言い分が軍勢力を欠くために無視された結果であり、開国史Ⅱ国辱史の一ページと

なるものであつた。

さらに、徳富が国辱と考えるのは、幕末の政治に外国の干渉があつたことである。小栗上野介に代表される幕閣には、フランスから借款して長州、薩摩に対抗する動きがあつたし、逆にイギリスは薩長に与っていた。慶応二年、イギリス公使パークスは鹿児島を訪問しているが、薩摩はこの機会に幕府とフランスの関係を彼に示唆し、イギリスとの関係を密にしたものと想定される。その後、西郷隆盛と勝海舟の会談により決着したといわれる江戸城開城の局面でも、パークスの影が見られると徳富は考える。幕閣にはフランスに近い小栗主戦派に対して、勝らの恭順派がいた。進軍してきた官軍に対して、パークスが居留地の安全確保を理由に江戸城攻撃に反対したことは、西郷も無視できなかったが、このパークスの背後には、勝海舟との連携があつたことも想定されるのである。維新後このパークスは痲癩もちの暴慢公使として知られていたが、それでも新政府は彼を「無二の相談相手」とせざるをえなかつたのであり、その有様は叩頭の政府と呼ぶのがふさわしいものであつた。<sup>20</sup>

## 2、維新と国民的精神

徳富はそうした日本開国史が、他面から言えば国内統一史であつたことに注目している。朝廷、幕府、薩長といった政治的軸があつて、それぞれの方策は相互に交差し、紆余曲折を経ながら進行していった。いずれの勢力にも「その相互の間において、勢力の接触衝突ありし

みならず、各自の中においても、また異分子の交闘「これあり」で、またどの立場も、「今日は甲党の説に傾き、明日は乙党の論行はる。すなわち、日本を通して、殆ど始終貫徹、一定の輿論なるものあらざりし」有様であった。しかし、そのなかにも「朝廷を尊崇すべき事」それに「外国に対立すべき事」という、二つの点では一致していた。問題は、「如何にして、朝廷を尊崇するか、如何なる程度まで尊崇するか」であり、また「如何にして外国と対立するか、何を以て対立するか」であった。<sup>21</sup>

徳富はこの二点に関する立場の相違から、「攘夷的尊皇派」と「開国的佐幕派」が生じたと考える。ただし、攘夷の立場にたつにせよ、開国が必須であることは理解しており、「彼らはむしろ夷を払ふの名をかりて、幕府を払ふの実を挙げ」ようとしていたのである。また、佐幕派の場合でも、「朝廷を圧迫して、北条氏の承久の故事を行はんとするにあらず」、「ただ徳川氏の社稷を保存しうる程度にまで、朝権の回復を止めんと欲したる」ものであった。<sup>22</sup>とすれば、幕末の政治上の争点は攘夷か開国かではなく、天皇親政か幕権保存かに帰着して行くこととなった。ただし、万延元年の井伊直弼の死後より慶応二年の孝明天皇崩御までは、公武合体が世論であった。当時の「老成人、有力者」たちは冒険に踏み出すことができず、「眼前に行ひうべき政策」として、その妥協策に落ち着いたのである。<sup>23</sup>

しかし、「如何に公武合体は、穩健、平当の意見なりとはいえ、その根底において、恕すべからざる一大矛盾」があった。すなわち、「政權

複本位制」であったことである。ここでは政權は二手に分かれるのであるから、「国論を統一し、国力を一致する」ことができないのである。「公武合体は、一定の期間において、一定の問題に就いては、あるいはこれを行ふをうべし」。しかし、「これを国家恒久の制度として、これをもって千変万化の内外の政務に应酬する」ことはできない。<sup>24</sup>幕府の側から見れば、公武合体は幕府の延命策であったが、幕府は「自ら旧態を維持すべからず、また維持あたわざる」ことが明らかになるにつれて、「皇政の復古」すなわち、「天下一新の大改革を断行」へと進んでいった。徳富は、この「政權複本位説制を放却して政權単本位論」へと舵をいち早くきつたのが岩倉具視であり、それが可能となったのは孝明天皇の存在が大きかったと見ていた。<sup>25</sup>

「吾人は維新の鴻図が、決して一人一個の力にて、成就したるものにあらざるを知る。しかも、もし個人について、その殊勲者をたずねんか、恐れながら孝明天皇をもつて、その第一位に据え奉らざるを得ざるべし」。<sup>26</sup>孝明天皇は「幕閣の為すままに、唯々諾々として、その成行きに一任し給うことはなかつた。孝明天皇は「ペリー来迫の当初より、幕閣の所行について、嚴重なる監視と、督励と、批評と、論導と、しかして遂ひに命令を与え給へり」。孝明天皇の対外的な見解は「尋常一様の攘夷論」に過ぎなかつたが、その結果「幕閣は、自から信ずるところに、立脚地を定むるあたはず。外は列強に脅され、内は京都に責められ、遂ひに内外板挟みの姿となりて、自滅したり」。孝明天皇の攘夷論は「幕府転覆のてこ」となったのである。徳富は孝明天皇が、「日



本天皇陛下としての天職について、十二分の御自覚」をもち、「国家の憂を以て、御一身の憂となし給ひ」、日本国が一体として列強と対立し、自発的、自主的に開国することが出来たことに注目するのである。<sup>27</sup>

このように日本は皇政維新の過程で、国内的には皇室を中心に統一し、対外的には皇室を中心に独立することが可能となったのであるが、それは一面では「国民的精神の勃興」でもあると指摘している。「一国の独立を維持せんと欲せば、国力を一にせざるべからず。国力を一にせんとするには、国民の仰いで以て宗とするところに、その政権を集中せざるべからず。かくの如くして皇政復古の理想は、現実的勢力となれり」。<sup>28</sup> すなわち、皇室を中心とした国民的一致が可能となったのであり、それによって徳川幕府は崩壊しただけでなく、幕府を倒した薩長二藩もまた廢藩置県によって消滅していった。ペリーの来航後の対外的な危機のなかで、「天下の人心は、期せずして、皇室に向ひ、しかして一君の下、億兆相集まる」ことになり、維新が実現した。これは「天下の無名氏ありて、その大勢を馴致した」ことを意味し、ここに国民精神の勃興があつたと見るわけである。<sup>29</sup>

ところで、徳富は日本の歴史の特徴として、「尊皇心」と「愛国心」が一致していたとも述べている。「我国においては、尊皇心と、愛国心とは、その名を殊にして、その実を一にせり。未だ吾君を尊んで、吾国を愛せざるものなく、未だ吾君を尊ばざるものなし」。<sup>30</sup> イギリスの名誉革命のように、君主国では「君に忠」と「国家に忠」との間に分裂する場合が少なくないが、日本は「開闢以来、我が国民をして、か

かる苦境に立たしめた実例は、殆どこれあらざりし」というわけである。日本には「シナの史上に輩出するがごとき、人君の天職を放却し、国家民人を、私欲の犠牲たらしめんとしたる君主は、一人も在ざざりしなり」。<sup>31</sup> その意味では、「我が帝国の歴史は、民本主義を以て一貫せり」とも言われるのであり、歴史をたずねれば、日本国民の尊皇心が「乾燥無味なる理論より来らずして、情誼と、事実との湊合より来れる」ことが知られるのであつた。<sup>32</sup>

### 3、帝国的自覚

このように明治維新は国民的精神の勃興によって達成されたのであるが、しかしなお日本国民は「外人恐怖病」と「外人崇拜病」の二種の病に取り付かれ、それから回復するのは容易でなかつた、と徳富は考える。「ペリーの江戸湾にて放ちし砲声は、日本国民長夜の眠を打ち覚ましたると同時に、また不安、恐怖の念を、長へに日本国民の胸底に印したり」。<sup>33</sup> この外人への恐怖心は、やがて外人崇拜心にもなったのであり、「我が国民が自信力において、大いに欠け、自尊心において、大いに欠け、いたずらに外人の顔色を見て、自ら喜憂を事と」することになった。<sup>34</sup> 外人恐怖病はとくに恐露病として現れ、その絶頂は明治二十四年の湖南事変（天津事件）に見出すことが出来た。また、電信線の下を扇子をかざして通行したといわれる熊本神風連の極端な異人排斥、洋風排斥も、対外的恐怖心からする発作と見られるのである。

徳富は維新の指導的政治家自身が、この二つの病に長く犯されていたと見ていた。「吾人は我が維新の元勳、明治の元老等が、愛国心の分量において、あるいは後進の士に倍するを思ふ。されど彼らはあたかも一度嘔みつけられたる犬の如く、いやしくも外人とさえ見れば、たちまち首を垂れ、尾を掉りて、ただ屏息す<sup>35</sup>。したがって、彼らの対外的態度は「叩頭的外交」であり、また「自屈的外交」であつたのである。「彼らが叩頭を以て、要訣とし、握手を以て、方便とし、被同化を以て、手段とし、遂ひに一方においては、無差別的欧化主義を宣伝し、他方においては、自屈的外交に安着している所以なり<sup>36</sup>。とりわけ、条約改正に関する対外的交渉の経緯はそのことを語つて余りあると見られるのである。

また、徳富は明治の元勳が日本を世界の強国とする将来像を持つていなかった点を厳しく批判している。岩倉、木戸、大久保といった人々は「国家経営の前途、すこぶる艱険にして、むしろ日本が、極東の片隅に、独立国としての生存を全うするを以て、望外の仕合せとなしたりしものに似たり。すなわち彼らの役目は、糞虫の番人なるに止まりたりしがごとし<sup>37</sup>。明治の元勳たちは、日本をイギリス、ロシア、ドイツ、フランス、アメリカと肩を並べる強国とする志望はなく、スイス、ベルギー、オランダなどの小国として「糞虫的独立」を維持することで満足していたというのである。しかし、それは日本の将来に対する当時の世界の見方でもあつた。訪日したアメリカ前大統領グラント將軍は、日本が外国の干渉を甘受するエジプトのようにならない

ようにと明治天皇に忠告したといわれている。その日本は日清戦争が転機となつて、強国への歩みを踏み出すこととなつた。

「若し維新改革を以て、日本国民が国民的自覚の時期とせば、二十七八年役は、日本国民が、帝國的自覚の時期と称するも、過当ならず。けだし日本国民は、二十有余年、幾多の曲折をへて、始めて我自ら我を知れり。我を知れりとは、我が力を知れるなり、我が天職を知れるなり<sup>38</sup>。すなわち、日清戦争を機に日本は「挙国一致、国家に向つて献身的ならん」とし、「縮小的小国民」ではなく「膨張的大国民」となることを志向するようになったのであつた。「ひとたび干戈を清国と交ふるや、国民は期せずして一致したり。この場合には、敵もなく、味方もなく、ただ日本国民ありしのみ。：非常の場合における、非常の国民的行為は、このごとくして立証せられたり。このごとくして我が国民は、その自信力を得たりしなり。自信力とは、単に兵力を意味せず、また国民として、国家の大事に際しての、措置についての自信力なり。すなわち従来の行掛かりを抛ち、己を棄てて、公に殉ずるの精神、およびその精神の実行これなり<sup>39</sup>。

さらに日清戦後において、ドイツ、フランス、ロシアが日本に割譲された遼東半島の還付を求めたいわゆる三国干渉は、日本国民に屈辱を与え、強国たるべき覚悟を与えるものであつた。徳富自身がこれを機に、国際政治における「力の福音」に目覚めたというのだが、日本国民も「空漠なる世界主義や、感情的なる人道主義の、頼むべからざるや、そもそもまた平和と好意とを以て、国際政局を料理せんとする、

マンチェスター派の頼むべからざる」を悟ることになった。そこで「怖外、崇外の両魔鬼より誘拐せられ、自屈、自卑、いたずらに安逸を貪りたる迷夢」から醒め、日本国民は「わが力をもって恃むべく、しかして頼むべきは、ただ我が力たることを覚悟し、さらに前途に向て、万難を排して、この力を養わざるべからざる」を覚悟することとなったというわけである。<sup>40</sup> 事実三国干渉は、国民の間に臥薪嘗胆の言葉を生み出し、「我が国民が…帝國的に活動の準備を、開始したる時期」となったのである。

徳富は帝国主義を国家、国民のもつ自然の衝動であると見ていた。「元来帝国主義は、主義といわんよりも、国民的本能なり。火の高きに騰るがごとく、水のひくきに就くがごとく、いやしくも民族たり、国民たるものは、みな膨張を求む」。<sup>41</sup> 「帝国主義は、国民の本能にして、あたかも国民をして、健全に、かつ自然なる状態にあらしめば、いかなる時節にも、如何なる場合にも、必ずまず発作すべきもの」なのである。<sup>42</sup> しかし、徳川幕府は「日本国民を、植木鉢に窘めて、盆栽たらしめ、籠中に飼養して、籠鳥たらしめ」ることとなった。すなわち、「自家の治安を維持するに是れ急にして、民族的雄飛を犠牲とするに頓着せざりし」ことになったのである。豊臣秀吉の同時代、イギリスのエリザベス女王は帝国主義の新紀元を画したが、「もし日本にして英国同様に、其時よりして、航海遠略を事とした」のであれば、「少なくともわが日本国民は、黒船を見て、腰を抜かす」ことはなかったというわけである。<sup>43</sup>

#### 四、日本帝国の使命

##### 1、日本帝国の危機

ところで、日清戦争によって日本国民が帝國的に覚醒したとすれば、日露戦争の勝利によって日本は「帝國的に世界より承認せられ」ることとなった。日露「戦役の結果は、列強に対し、始めて我よりも大使を送り、彼らよりも大使を送る事となれり。戦役の結果は、韓国を保護国とし、さらにこれを併合しても、誰しも異存を唱ふるものなきこととなれり。…列強が我が日本帝国の勃興を悦ぶと否とは、別問題として、誰しも極東の政局において、我を無視する能はざること」<sup>44</sup> となった。すなわち、日本帝国はここに「推しもおされもせぬ、東洋の覇者」となったのである。では、「我が国民は果たして、この東洋の盟主たる大責任を自覚したるか。…わが国民が小成に安んじ、小功に誇り、却てその当面の大責任を、放却しつつ」あることはないであろうか、これが徳富の憂慮するところであった。

実際、徳富には「我が帝国の現状が、大危機に立つ」という自覚があった。第一次世界大戦下の国際的状况で、日本は世界にあって孤立している。「日英同盟は、半ば死せり。日露の關係は、今なお浮調子なり。日独は敵也。日米は有隣なれども、油断も、隙間もできぬ有隣なり。吾人は日本を、世界の孤立国といはざるも、殆ど孤立国に類すと、いいうべきを疑はず」<sup>45</sup>。とりわけ、この時点で徳富はすでに日米関係

を危惧していたことが注目される。アメリカは建国以来、戦争によって領土を拡張した歴史をもち、その外交方針も「本来無遠慮」であることはよく知られている。そのアメリカの政治に大きな影響を持つ世論は、陸海軍の拡張を支持しているが、それは当面ドイツの潜航艇への対応であるとしても、太平洋問題も念頭に置かれている。アメリカには大型駆逐艦、大型潜水艇など、海軍増強計画が進んでおり、太平洋方面の仮想敵国は日本に他ならないのである。<sup>46</sup>

日米間においては、カリフォルニア州の日本移民への差別的取り扱いの問題があるが、それよりもシナをめぐる衝突が懸念される、と徳富は考える。アメリカはモンロー主義によって南北アメリカにおける主導権を確保しながら、極東問題に対しても積極的に関与している。「極東問題については、日本は国力を賭しても、自らその解決の主人公たからざるべからざるの、使命を感じつつある。もし、米国にして、万一本日本のこの使命の、遂行を遮断するがときあらば、吾人は日米の国交について、少なからざる危険を感じざるを得ず。しかして、若し米国の武装充実せんか、吾人は少なくとも、これが為に吾人の使命を放却するか、しからざれば米国より一撃を加えられるかの、二者を択まざるの時節の、到来することを、今日より覚悟せざるべからざるなり」<sup>47</sup>。ここには確かに、太平洋戦争に至る日米対立の道筋が見通されていく。

いずれにせよ、徳富はこの時点で日本帝国は岐路に立っていると考える。「日本は強国として存するか、亡国として滅ぶるか、の十字街頭

に立てり」。すなわち、「程よき程度にて、呑気に一国の独立を維持するは、明治の半世紀における、行き掛りの上にて、もはや不可能のこととな」<sup>48</sup>。とすれば、我が国民は、強国足るべき方針を定め、強国足るべき準備をつくし、強国足るべき努力をしなければならぬ。しかし現実にはそうではない。「国家の無方針は、国民をして没理想、無希望の徒たらしむ」ことになっている。無方針、無準備、無努力は三位一体であって、「吾人は実に我が帝国の前途を思うて、寒心せざらんとするも能はず」、これが徳富の偽らざる実感であった。

そもそも維新以後の日本国民の対外的態度は一貫せず、帝国主義的志向も間歇的なものであった。鞭を見て走り出す馬のように、「外間の刺戟あれば、たちまち発作するに拘らず、一たびその刺戟止めば、またたちまち休歇す」という有様だというのである。「要するに我が日本国民は、国家が剃刀の刃を渡るがごとく、ただ帝国主義によりて、この国運を、世界列強角逐の際に、支持せざるべからざる大道理を、未だ徹底的に会得せざるが如し」<sup>50</sup>。たしかに、日本国民は国家を誇り、国家を憂いているのだが、そうした感情も外からの刺激に応じたもので、突発的であるし野次馬的興奮に過ぎない。今日の帝国主義も、日本国民が世界の情勢を予見し、周到な計画と準備を持って帝国を築いてきたとはいえない。むしろ、さまざまな幸運が重なって今日の地位を得ている。日清戦争の勝利も「吾人の強きよりも、シナ人の弱かりし為」であったし、日露戦争の勝利も「彼（露）は千里懸軍にして、我は地利を占め、かつもつとも我に有利なる場合に、干戈をおさめた」

からなのである。<sup>51</sup>

日本国民はいまだ帝国主義を正しく理解しているとはいえないし、正しく実行しているともいえない。国民の多数は「帝国主義とは、巨大なる戦闘艦を作る事と思ひ、軍備を拡張する事と思ひ、十年に一回戦争する事と思ひ、朝鮮を併合したる事を思ふ」。あるいは、「帝国主義を活動を以て、国民的虚栄心の発動と、同一視するもの」もいる。「国民的虚栄心」は「帝国主義の面を被りて、勝手に増長し、ついに驕慢、自から裁するを知らざるに至るの恐れなしとせざる」とりわけ、徳富が危惧するのは日本の帝国主義には、「道義的根柢を有せざる事」であった。帝国主義を悪事と思つて遂行することはできないし、正邪の判断を放棄して行うこともできないし、本能のままに行うことも適切ではない。徳富は帝国主義は国家拡大の自然の衝動と考えていたが、「本能的に発生し」たものを、「道徳的に鍛錬」しなければならぬといふのである。<sup>53</sup>

## 2、亜細亜モンロー主義

徳富が提起する日本帝国の理想とは、世界における白人の専横を打破し、人種間の力の均衡を回復することであり、亜細亜人のことは亜細亜人の手でと提唱する亜細亜モンロー主義であった。「日本帝国の使命は奈何。…手の届くかぎりにおいて、我が理想を求めしめよ。吾人は世界統一に先んじ、世界における黄白人種の均衡を回復するを以て、むしろ急務とせざるべからざるにあらずや」。「亜細亜モンロー主

義とは、亜細亜のことは、亜細亜によりて、これを処理するの主義也。亜細亜人というも、日本国民以外には、さしよりこの任務に膺るべき資格なしとせば、亜細亜モンロー主義は、すなわち日本人によりて、アジアを処理するの主義なり」とはいつても、徳富は亜細亜より白人を駆逐するという偏狭な意見をもっているわけではないとも付記している。ただ、日本は「東洋人種よりは、敬愛せられ、白人種よりは、少なくとも畏憚せらる」ことが望ましいと考えたのである。

徳富はこの亜細亜モンロー主義の構想を、小乗的使命と大乘的使命として説明するのだが、まず小乗的使命とは東洋の自治であった。「亜細亜モンロー主義は、東洋自治主義なり。東洋の事は、東洋人がこれを処理するの主義也。今日においては、欧州の問題は、欧州人これを処理し、南北米州の問題は、南北米州人これを処理し、豪州の問題は、豪州人これを処理す。ひとり東洋の問題に至りては、東洋人概ね手を束ね、ただ欧米人の処理に一任す」<sup>55</sup>。これでは東洋人は、意気地なしでもあり、卑屈でもあり、不見識である。実際、唯一白人に対抗して自治能力を行使できるのは日本人であるから、そこに日本人の指導力の下に東洋の自治を実現することが課題となるのであり、そこに日本人の使命があると考えられるのである。

「彼ら（白人）は……わが東洋人士を以て、世界の劣等人種となし、これを取扱ふに、特殊部落を以てす。彼らの同胞主義や、白人間の同胞主義なり。彼らの平等主義や、白人間の平等主義のみ。彼らの博愛主義や、白人間の博愛主義のみ。彼らも時としては、論理の厳正なる

方式のために、不本意ながら、これを世界共通的に言説することあり。その実際について見れば、なおこれ依然たる白人独尊主義なり<sup>56</sup>。こうした現実からすれば、日本人が主導して亜細亜モンロー主義を實現することは、いまは白人の間でしか實現していない、平等主義、博愛主義、同胞主義を、人種の違いを超えて實現することにもなるのである。

日本人の使命は実に、「自から黄色人種たるを愧じとせず、自家の面目を、堂々露呈し、他の長を採り、我が短を補ひ、自から研磨、精進して、すべての点に於て、白人以上の資格を備え、事実の論理の前に、白人を承服せしめ、さらにわが東洋人士を誘掖して、白人と対等の交際をなさしむるにあり<sup>57</sup>」。徳富は亜細亜モンロー主義には、さらに一歩進んで、日本が「東西融和の仲介者」となるという大乗的な使命があると考える。日本は「東洋人の急先鋒となりて、白人を退治するにあらずして、白人に向て、東洋を理解せしめ、真成なる四海兄弟の実を挙ぐるの手引者となる<sup>58</sup>」。使命があるというわけである。

「我が日本国民にして、真に世界の長を採り、列国の善を拵び、虚心坦懐、自ら拘泥するところなくんば、その行動は、期せずして世界一和、坤球一団の先を開くもの」となるであろう。維新の目的は日本一国の独立の確保であったが、今日の課題は帝国の独立にとどまらず帝国の拡張である。帝国を拡張し、亜細亜モンロー主義によって、「我が弱小なる同胞の為に、その蹂躪せられたる権利を回復するは、東洋における先覚者たる、大和民族の責任」ではないのか。その上で、白人

の「人種的偏見や、宗教的僻習を打破して、東西文明は、互いに平等の立場において握手せば、四海兄弟、万邦一家たるの理想」が實現するであろう<sup>59</sup>。徳富の構想によれば、これが一国の独立から亜細亜モンロー主義を経て、世界平和に至る道なのであり、そこにこそ日本国民の使命があつたのである。

## 五、「大正の青年」と「日本魂」

### 1、積極的忠君愛国

徳富蘇峰が見る日本国民の現状は、その重大な使命を自覚していることからは程遠いものであつた。国民の意志も定かではなく、日本帝国の国是もなく、東洋自治の使命も、その天職の自覚も持つてはいない。「我が帝国の一大病根は、国家的没理想にあり、国民的没志望にあり」。日本は「死鯨のごとく、波間に漂流し、国民が屍肉に集まる蛆虫のごとく、蠢動するも、まことにやむを得ざるなり」。日本国民は不勉強ではないのか。日本国民は覚醒し、国是を定め、日本帝国の使命を担いうる人物を教育しなければならぬ。日本帝国は愛国教育を必要とし、「日本国民としての責任、職分」を教えなければならない。徳富はそれを「日本魂の涵養」とも語っている。日本帝国の将来を担うべき「大正の青年」は、まさしくその「日本魂」を身につけなければならないのであつた<sup>60</sup>。

では、「日本魂」とは何かといえ、それは端的に言つて、「忠君愛

国の精神」であった。それを徳富は次のように説明している。すなわち「君国の為には、わが生命、財産、その他あらゆるものを献ぐるの精神なり。如何なる場合にも、君国を第一にし、我を第二にするの精神なり。国家の緩急に際しては、他の催告を待たず、自ら率先して、これに奉ずるの精神なり。古人のいわゆる『海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、大王の辺にこそ死なめ、長閑には死なじ』とはこの事なり」。<sup>61</sup>このように日本帝国は君国であるから、君主、君国への奉仕を第一にすることというのだが、それは国家主義とか個人主義とかの立場を超えたものであり、「祖先以来帝国の臣民は、君国のためにその身を竭し、その力を致すは、先天的の約束なり」というわけである。

日本においては「皇室と国家は一体」であり、忠君と愛国は一体である。「忠君愛国は、宗教以上の宗教なり、哲学以上の哲学なり、学問以上の学問なり。およそ日本国民としては、誰しもあれ、まずこの日本魂を主持して、しかして後各々その好むところに従って、その向ふところを定むべきなり」。<sup>62</sup>したがって、日本国民としては、「この忠君愛国の中枢において、一致点を見出」すことによって、「はじめて国民的統一を見る」ことができる。その一致点がなければ、「日本は仏教国たり、基督教国たり、農民国たり、商工業国たり、官僚国たり、政党国たり、資本家国たり、労働者国たり、海軍国たり、陸軍国たり。すなわち、職業の如何により、身分の如何により、信仰の如何により、意見の如何により、千差万別、四分五裂の他あらゆるべし」。日本国は「ただこの共通の日本魂あり、これをもって常に挙国一致」が可能とな

るといふ。<sup>63</sup>とすれば、日本魂の涵養こそが将来の日本を左右することになるのである。

その場合、徳富はその忠君愛国は積極的で、膨張的、進取的でなければならぬという。「第一義は、皇威を四海に布き、皇沢を八荒に及ぼすより先なるはなし。愛国の第一義は、大日本帝国を、世界第一等の強国、雄国、正善国たらしむるより先なるはなし」。すなわち、天皇の肖像の前に一日百回叩頭することが重要なのではなく、国の為に命を惜しまなければそれでよいというのでもない。日本帝国の拡張、亜細亜モンロー主義の実現を担う忠君愛国でなければならぬのである。そのためには精神的膨張が必要であった。「精神的膨張とは、…虚心坦懐に、世界の善を採取するにあり、世界の美を採納するにあり。精神的に世界より学び、さらに精神的世界のすべてよりも、超越するにあり。けだし世界を家とするの氣象は、まず世界を師とすることより来る」。<sup>64</sup>いわば、世界の文明に開かれた忠君愛国でなければならぬわけである。

もう一つ必要なことは、尚武的氣象であった。「精神的膨張に際して、必須の条件は、尚武的氣象なり。…すなわち、国民が挙げて兵役に就くを、愉快なる男兒の義務とするのみならず、何時たりとも、国家の為に戦場に立ちて、一命を献ぐるの氣象なり」。すなわち尚武的氣象とは「戦争を以て、人間尋常の出来事となし、つねにその覚悟を忘れぬ」ことなのだが、現今の第一次世界大戦はそのことの重要性を改めて示した。「今回の世界的大戦争は、吾人に向て、日進文明的科

学応用の、勝敗の数に大関係あるを教へたるごとく、また勇氣が実に勝敗の一大要素たるを教えたり<sup>65</sup>。この意味では、「日本魂」といい忠君愛国というものも、伝統日本の「古めかしい説法」ではなく、世界列強が国民に求める同時代的な精神的資質であった。

## 2、「日本魂」

このように徳富蘇峰が提起する「日本魂」は、一面では日本の歴史を一貫して見られる家族国家的一体感であったが、他面では、第一次世界大戦当時の列国の角逐競争において、日本帝国を拡張させる精神でもあった。「日本魂」は旧態依然の忠孝主義に止まるものではならなかった。徳富の眼からみれば、教育勅語による教育は「官学的形式の型に投げ入れられ」、「微不至旧式の忠孝論は、無意味に、無生命に繰り返され」ている。「忠孝の模範として、楠公や、四十七士や、曾我兄弟」が取り上げられているが、「彼らは当時の社会において、その最善をつくしたる」に過ぎない。今日の忠君愛国は「湊川の討死や、富士裾野の敵討ち」に止まるものであつてはならない。当今の教育は「小人島の庄屋」を育成しているもので、偏狭なる忠孝主義はむしろ大正の青年を誤らせていると見られるのである<sup>66</sup>。

それゆえにこそ、今日の忠君愛国は積極的、進取的、膨張的なものでなければならず、精神的にも世界に学ばなければならないのである。たとえば「世界を家とするの精神」、「世界を呑むの意気」をもつ「英国魂」が注目された。イギリス人の議論には「大英主義」があり、「小

英主義」があるが、両者に共通して「ほとんど無意識的に、帝国主義を把持しつつ」あり、「世界的大帝國」を創立し維持するものとなっている。イギリス人はしばしば「島国根性的國民」「世間知らずの田舎漢」と非難されるが、しかし他からそのように見られていることは、むしろ「彼らが英人、すなわち世界に主人たる英人としての、自信のあまりに強盛なるが為」なのである。イギリス人の一家を見ると、カナダに嫁するものあり、豪州に行くものあり、シナに赴任するものあり、あるいは南アフリカに行くものあり、南米に行くものもある。このようにイギリス人の「意気すでに世界を呑みつつある」のである<sup>67</sup>。

そのイギリスを支えたのは貴族であったと徳富は見ていた。もっとも一九世紀のイギリスでは議会改革が行われ、その前半では政権は中等階級に移り、その後半には選挙権が拡張されて労働者に移っている。その意味では平民主義が勝利した歴史なのだが、その彼らは「大英国の主権を振り回すには、未だその教養において、多大の欠陥ある」と見られた。イギリスの「貴族および中等階級の、上流に属する部分」は、かれらが従来もつていた政権と兵権を失っているにもかかわらず、今次の戦争でも、「当然の義務とし、愉快なる義務とし、名誉ある義務とし、出陣」している。彼らは「我國の貴族および上流者有希に比して、智識の点において、能力の点において、而して奉公の点において、すこぶる優勝の地位を占むるは、殆ど疑う余地なき事実なるが如し」。日本国民は、この英国貴族がもつ「英国魂」に学ばなければならないのである<sup>68</sup>。



他方、一九世紀の新興国ドイツも日本帝国に重要な示唆をあたえるものであった。ドイツは「五十有余の諸王国、諸公国、諸自由市府など割拠」していた状態から帝国統一を成し遂げたが、その国民的精神「ドイツ魂」の形成に寄与したのは、ナポレオンの進出に際して、「ドイツ国民に告ぐ」を講演したフイヒテであり、また歴史家にして政治改革者スタインであった。とりわけスタインは、ドイツ統一がドイツ民族の道義的復活に基礎をおくべきこと、また憲法制定にあたってはつねにドイツの過去と将来を見据えて、歴史的視野において行ったのであった。スタインはプロイセンの学校と兵営において、「職分の觀念」「献身的精神」「愛国の熱誠」を教え、「ドイツ全体の標本」としようとしたのであり、それこそが「国家独立の基本」であり、ドイツ躍進の基礎となったと考えられるのである。<sup>69</sup>

徳富によれば、ドイツは一九世紀の中期に鉄道を施設しまた各種製造業を移植させていったが、とりわけ七〇年代以降ドイツ独特の発展が見られた。ドイツ人は「軍略を以て、ほとんどの人事万端に応用し、適用し、商工業における驚天動地の大進歩」をもたらして行ったのである。「ドイツの物質的成功は、実にその節制ある団体の、秩序ある運動によればなり。一個の英人と、一個のドイツ人と比較せば、両者の優劣如何は問題なり。されどこれを団体としてみれば、一方は烏合の衆のみ、他方は精練の兵のみ。その勝敗の数、戦はずして下すべきなり。すなわちあるいは製綱業のごとき、あるいは運輸業の如き、あるいは甜菜糖、あるいはアニリン染料、その他あらゆる生産界の事業、

一として一国の力を傾けて、これに従はざるはなきなり」<sup>70</sup>したがって、一九世紀後半のドイツの台頭は軍国主義の勝利であり、またそれを支えた「ドイツ魂」の勝利なのであった。

徳富はさらに、ドイツ帝国が強大なる理由を次のように指摘している。その第一は「ドイツの国是の確定」であり、ドイツにおいては「上はカイゼルより。下は一兵卒に至るまで」、「ドイツ民族の、世界的大帝国の建立と、ドイツ文化の世界的宣伝」とに照準を合わせていることが注目される。しかも、第二にドイツ人は「その国是を直截に、簡捷に、しかして徹底的に遂行」している。また、第三に「その組織の行き届きたる」ことが重要である。「けだし軍人も、政治家も、大学の教授も、田舎の牧師も、外国の出稼ぎ人も、商店の番頭も、みな心を一にし、力をあわせ、同一の目的に向て、各自受持の仕事、油断なく、隙間なく働くが故に、ここにはじめて軍国主義の効果を見るを得るなり」。さらに第四としてドイツには「油断なき準備」があり、第五として、クラウゼウィッツの軍事哲学にあるように「目的の遂行に向つて、無遠慮、無頓着なる」ことも重要であった。こうしたドイツの軍国主義を支えたのは「地方の小貴族と、農民」であり、小貴族は「ドイツの脊髄骨」であり、農民は「簡質、剛健、神を畏れ、骨を惜しまざる」人々であった。<sup>71</sup>

このように徳富は日本帝国の進展とその精神的基礎を考える上で、一九世紀のドイツ帝国の軍国主義を参考にしたのだが、他方、太平洋の対岸にある「米魂」にも注意を促していた。アメリカは自由の大

地であり、「個人の活動をなすに、なんらの面倒もなく、支障もなし」、したがってアメリカ人は「快活、有為、不羈、自恃」の人であった。「米国魂」とは、「ムンステルベルク曰く、自ら指導する精神これ也。ウアン・ダイク曰く、自己に依頼するの精神是れなりと。すなわち、エマーソンが、吾人は自個の脚にて行き、自個の手にて働き、自個の心を口にて語るといいしもの」だといっているのである。<sup>72</sup> この「不羈独立」の精神にくわえて、徳富はアメリカ人に「精力万能主義」を見ていた。「米人の眼中には、難事なし。彼らは決して愚痴をこぼさぬなり。彼らは未だ家根が全く焼け落ちざるに、早くも新築に取り掛かるなり。ホドソン河における大鉄橋も、この如くにして架橋せり。パナマ運河も、この如くにして開鑿せり」<sup>73</sup>。アメリカ人を黄金崇拜といつてはいけない。黄金の為に活動するというよりは活動の為に活動する人々だといわけである。

しかも、彼らは「他力の統制に甘んぜずして、自力の統制を全うする」人々であった。「彼らは無規則の中に、自ら規則を定め、無秩序の中に、自ら秩序を保つ。この気風は集会の席上においても、電車の中においても、旅館においても、公園においても、随時随所に発見」されるというのである。この自発的協力の精神、自力的組織を作る卓越した能力は、愛国心にも現れている。アメリカ人は「世界市民の寄合所帯」であって、ドイツ人もいればアイルランド人もおり、スカンジナビア人もいる。しかし「彼らが自ら組織し、自ら統制する能力と傾向とは、これを国家的要件にも応用するを得るなり。米人は他人より

して、愛国心を強いられず。されど彼らは自国の為に貢献すべき義務を、自ら閑却せざるなり」<sup>74</sup>。したがって、アメリカの帝国主義も、決して一部の野心家の製造物ではなく、その国民的背景を持つことを銘記しなければならぬのである。

徳富は「大正の青年」が「日本魂」を涵養する上で、この「米国魂」にも学ぶことが必要であると考えていた。徳富からみれば日本の青年の欠点は「あまりに他力に依頼し、他方においては、あまりに一騎打に逸る弊なしとせず」。したがって、一方では「自恃の精神」を他方においては「社会心」すなわち「協同生活の一員としての、その任意的義務を執行するの心掛け」を学ばなければならないのである。<sup>75</sup> 今日の帝国的勢力の競争は「文明的競争」であり「大仕掛けの競争」である。「文明の勢力とは、組織的勢力に外ならざるなり」とすれば、日本もまた「国民的組織力」を養わなければならないのである。徳富は大正の青年がこの「社会心」を養う上では青年会の事業に期待していた。また、「自恃の精神」の模範としてあげたのは、アメリカの詩人ホイットマンの「公道歌」の一節であった。徳富は「大正の青年」に対し、「自力に依頼して、しかして後他力に依頼せんことを望む。…自個を捨てて他に殉ずる、献身的精神のごときも、畢竟は自個ありて後の事なり」とも語っている。<sup>76</sup> 徳富にあつては、「日本魂」である忠君愛国の精神も、このエマーソン流の「自恃の精神」を前提としていたのである。

## 六、おわりに

以上、『大正の青年と帝国の前途』を手がかりにして、徳富蘇峰の「大正の青年」への訴えを見てきた。明治十九年の時点での徳富は、平民主義を唱え、「明治の青年」には西洋平民社会の平民道徳を身につけることを力説したのであるが、大正五年の時点では、帝国日本を支える「日本魂」、「積極的な忠君愛国」を奨励していた。「平民道徳」と「日本魂」では、思想的な方向が正反対のようではあるが、新興国日本のナショナリズムの要請に応えるものとしては連続していた。西洋の立憲政治と議会政治を導入しつつあった時期では、次代を担う青年は、そうした諸制度を精神的な次元から学ばなければならないと考えたのである。いわば明治の元勳たちの上からの欧化主義に対して、徳富は下から、急進的な欧化主義を主張したのであった。

すでに指摘したように、日清戦争は徳富の思想的な転機となった。徳富の主要な関心はそれまでは藩閥打倒を掲げた国内政治の改革にあったのだが、これを機に東アジアにおける日本の地位の確立へと向かい、さらには日本の強国化、積極的な帝国主義的拡張に向ったのである。とくに三国干渉に衝撃を受けた徳富は、将来の日露戦に備えるべく、直接政治の世界に踏み込み、一時は内務省参事官となり、後には桂太郎の盟友として精力的に活動したのであった。その桂の死後、ジャーナリストとして精力的な活動を再開した徳富は、日本帝国の將

来が必ずしも容易でないことを分析し、次代を担う「大正の青年」に憂国の情を訴え、「積極的忠君愛国」を提起したのであった。ただし、この「日本魂」「忠君愛国」は単純な伝統回帰ではなく、日本の歴史を貫く「皇室中心主義」を踏まえたうえで、同時代の帝国列強の精神、すなわち「英国魂」「ドイツ魂」「アメリカ魂」にも学ぶべきものとして性格づけられていたのである。

その意味では、若い日に徳富が唱えた「平民道徳」は、日本帝国を担う「日本魂」にも生きていたといわなければならない。というのは、日本においては国民的一体感、国家への献身の源は、皇室であると考えられていたが、「社会心」とか「自恃の精神」はアメリカ人に学ぶことが推奨されていたからである。『将来之日本』ではロングフェローの「田舎の鉄鍛工」が引用されていたのだが、『大正の青年と帝国の前途』でも、ホイットマンの「公道歌」が引用されていた。「日本魂」と「自恃の精神」の組み合わせは、徳富自身の内面を示唆するものであるが、そのようなことは一体可能なのであろうか。『将来之日本』で、西洋的知識と東洋的道徳の組み合わせが不可能であることを力説していた徳富は、ここでの矛盾についてはどのように考えたのであろうか。

残念ながら『大正の青年と帝国の前途』にはその疑問に答える記述は見られない。あえて徳富の立場に即していえば、日本帝国の危機的状況が「皇室中心主義」を不可欠としたというものである。幕末に對外的な危機のなかで維新を実現する際に、藩の利害と超えた国民精神の勃興があったが、その中心には尊皇思想があった。とすれば、その

現実を踏まえて帝国日本の精神的基盤を探索する上で、その遺産を継承するしかないと考えたのである。日本帝国は尊皇心によって感情的に一体化するしかない。しかしまた、そのすぐ後に、徳富は旧式の忠孝主義ではとてもやっていけないことも付け加えなければならなかった。帝国日本を道徳的に支える、公德心も、時間の観念も、自信力も、積極的な活動も、組織的な活動も、尊皇思想から導き出すことは不可能であったからである。徳富の「日本魂」は、伝統と欧化のある種の融合であった。

注

- 1 本稿は、梅津順一「徳富蘇峰と「力の福音」」(『聖学院大学論叢』一九一、二〇〇六年一月)の続編である。徳富蘇峰に関する最近の文献については、そこで触れておいたのでここでは省略する。筆者は戦時中のベストセラー『国民必勝読本』までの徳富の著作の連続と断絶とを、時代の問題と対応させながら検討することを課題としている。なお、この夏『徳富蘇峰 終戦後日記』(講談社、二〇〇六年)が刊行されて話題となった。
- 2 徳富蘇峰『大正の青年と帝国の前途』(時事通信社、一九六五年)。以下では、この版から引用するが、一部に読みやすさを考慮して、漢字かな遣いを変更した部分がある。
- 3 福沢と徳富の関係については、梅津順一『文明日本と市民的主体―福沢諭吉・徳富蘇峰・内村鑑三』(聖学院大学出版会、二〇〇二

年)参照。

- 4 徳富蘇峰『新日本之青年』(一八八七年初出)、ここでのテキストは神島二郎編『徳富蘇峰集』(筑摩書房、一九七八年)所収を用いる。一五ページ。
- 5 『新日本之青年』一六ページ。
- 6 『新日本之青年』一七ページ。
- 7 『新日本之青年』一七ページ。
- 8 『新日本之青年』一〇ページ。
- 9 『大正の青年と帝国の前途』一ページ。
- 10 『大正の青年と帝国の前途』三ページ。
- 11 『大正の青年と帝国の前途』六ページ以下。
- 12 『大正の青年と帝国の前途』一五ページ。
- 13 『大正の青年と帝国の前途』一七、一八ページ。
- 14 『大正の青年と帝国の前途』一九ページ。
- 15 『大正の青年と帝国の前途』二三ページ。
- 16 『大正の青年と帝国の前途』二四、二五ページ。
- 17 『大正の青年と帝国の前途』二七―二九ページ。
- 18 『大正の青年と帝国の前途』三二、三三ページ。
- 19 『大正の青年と帝国の前途』四〇、四一ページ。
- 20 『大正の青年と帝国の前途』五四ページ以下。
- 21 『大正の青年と帝国の前途』九八ページ。
- 22 『大正の青年と帝国の前途』九八ページ。

- 23 『大正の青年と帝国の前途』 八一、九九ページ。
- 24 『大正の青年と帝国の前途』 九九ページ。
- 25 『大正の青年と帝国の前途』 一〇一―一二二ページ。
- 26 『大正の青年と帝国の前途』 一一五ページ。
- 27 『大正の青年と帝国の前途』 一二六、一三八ページ。
- 28 『大正の青年と帝国の前途』 一二二ページ。
- 29 『大正の青年と帝国の前途』 一二五ページ。
- 30 『大正の青年と帝国の前途』 一三二ページ。
- 31 『大正の青年と帝国の前途』 一三三ページ。
- 32 『大正の青年と帝国の前途』 一三三、一三四ページ。
- 33 『大正の青年と帝国の前途』 一三五ページ。
- 34 『大正の青年と帝国の前途』 一三六ページ。
- 35 『大正の青年と帝国の前途』 一五七ページ。
- 36 『大正の青年と帝国の前途』 一五八ページ。
- 37 『大正の青年と帝国の前途』 一六一ページ。
- 38 『大正の青年と帝国の前途』 一六七ページ。
- 39 『大正の青年と帝国の前途』 一六九ページ。
- 40 『大正の青年と帝国の前途』 一七一ページ。
- 41 『大正の青年と帝国の前途』 一七八、一七九ページ。
- 42 『大正の青年と帝国の前途』 一八八ページ。
- 43 『大正の青年と帝国の前途』 一七九、一八〇ページ。
- 44 『大正の青年と帝国の前途』 二二二ページ。
- 45 『大正の青年と帝国の前途』 三六四ページ。
- 46 『大正の青年と帝国の前途』 三四四ページ以下。
- 47 『大正の青年と帝国の前途』 三五〇ページ。
- 48 『大正の青年と帝国の前途』 二七二ページ。
- 49 『大正の青年と帝国の前途』 二七三ページ。
- 50 『大正の青年と帝国の前途』 二六六ページ。
- 51 『大正の青年と帝国の前途』 二六七、二六八ページ。
- 52 『大正の青年と帝国の前途』 二六九ページ。
- 53 『大正の青年と帝国の前途』 二七〇ページ。
- 54 『大正の青年と帝国の前途』 二八〇、二八一ページ。
- 55 『大正の青年と帝国の前途』 二八二、二八三ページ。
- 56 『大正の青年と帝国の前途』 二八三、二八四ページ。
- 57 『大正の青年と帝国の前途』 二八四ページ。
- 58 『大正の青年と帝国の前途』 二八六ページ。
- 59 『大正の青年と帝国の前途』 二八六、二八七ページ。
- 60 『大正の青年と帝国の前途』 三六六、三六七ページ。
- 61 『大正の青年と帝国の前途』 三七一ページ。
- 62 『大正の青年と帝国の前途』 三七三ページ。
- 63 『大正の青年と帝国の前途』 三七四ページ。
- 64 『大正の青年と帝国の前途』 三七六、三七七ページ。
- 65 『大正の青年と帝国の前途』 三七八―三八〇ページ。
- 66 『大正の青年と帝国の前途』 一五三、一五四ページ。

- 67 『大正の青年と帝国の前途』 三一三、三一四ページ。  
68 『大正の青年と帝国の前途』 三一五―三一七ページ。  
69 『大正の青年と帝国の前途』 三二四ページ以下。  
70 『大正の青年と帝国の前途』 三三二ページ。  
71 『大正の青年と帝国の前途』 三四〇―三四三ページ。  
72 『大正の青年と帝国の前途』 三五四ページ。  
73 『大正の青年と帝国の前途』 三五四、三五五ページ。  
74 『大正の青年と帝国の前途』 三五六―三五八ページ。  
75 『大正の青年と帝国の前途』 四三七ページ。  
76 『大正の青年と帝国の前途』 四四四ページ。

# Soho Tokutomi and “the Soul of Imperial Japan”

— with a Reference to the Mission of “Taisho Youth” —

Junichi UMETSU

Soho Tokutomi, one of the most influential ideologists in pre-war Japan, was a convert to ‘the Gospel of Power (Tikarano Hukuin)’. Starting as a protagonist for free trade and peace, he changed his mind to become an Imperialist after the Shino-Japan War. Though he once proposed ‘Democratic Morals (Heimin Dotoku)’ to Meiji youth, he suggested to Taisho youth ‘Loyalty to the Prince and Devotion to the Nation (Tyukun Aikoku)’. His ‘Soul of Imperial Japan’ is not to be interpreted as a simple return to the traditional mind. He also asked others to learn from ‘the German Soul’, ‘the British Soul’ and ‘the Spirit of America’. ‘Civil virtue’ and ‘self-reliance’ and ‘time control’ were essential to ‘the soul of Imperial Japan’.

---

**Key words:** 徳富蘇峰, 帝国主義, 青年, 忠君愛国